

自然保育推進事業 活動報告・2022 年度

団体名

認定子ども園 さざなみの森 [東広島]

〒739.0041 広島県 東広島市 西条町 寺家 261

活動テーマ

1. 野外フィールドでの保育の「拠点づくり」
2. 子どもたちの暮らしと遊びを育むために「土」を育てる
3. 自然と子どもを「つなぐ人」との出会い
4. 地域との相互貢献を目指して



1. 野外フィールドでの保育の「拠点づくり」



2022年度は、自然のなかでの暮らし・遊びの拠点となるフィールドを整備した。

暮らしも、遊びも、森のなか。

「自然へ遊びに行く」から

「自然のなかで暮らし、遊ぶ」へ。

井戸も掘った。大地から水を受け取る。

点的な自然体験ではなく、

四季を通して、自然も空間も広が

途切れることなくつながっていく。

その場面をみまもる大人には、

人間と自然、双方への理解と知恵が求められる。

これからさらに研鑽を積んでいきたい。

新緑の心地よさ。風の匂いが変わる。

小さな小さな花々の世界。

獣のような竹の姿を毎日間近に感じる。

どどん生えてくる。あつというまにぐんぐん伸びる。

梅雨時期は雨の中での保育。

雨の日の自然のいきいきとしたこと。

真夏の森の暑さ・涼しさ。

空気が溜まると蚊が湧いてくる。蜂も蛇もいる。

楽しいだけではない、多様な生き物との出会い。

そして、秋の鮮やかさ・豊かさ、冬の寒さ、静かさ…。

全身で、五感ぜんぶで経験できる日々。

自然の中に身を置くことの価値は、計り知れない。

2. 子どもたちの暮らしと遊びを育むために「土」を育てる



自然の力と、子どもたちの暮らしの、
最も身近な接点のひとつ「農」。

「農」の周りには、いつでも緑があり、生き物がいる。
水があり、土があり、風があり、そして太陽がある。

畑づくりに取り組みながら、子どもたちは
暮らしと遊びが繋がった大らかな環境のなかで
継続的に作物を育てる時間感覚、変化との出会い、
関わり続ける意思の力や、自然の生命に触れる喜びを知る。

そして、それは業務ではなく遊びと隣り合わせの、楽しいこと。
育てた野菜は美味しく食べられる、という姿も当たり前になった。

そんな時間と空間を、もっともっと子どもたちの身近にしていきたい、
ということで、2022年度は、園内でも土壌環境改良に着手した。
畑を作れるように、腐葉土を集めたり、米糠を混ぜたり。
実験したり地域の農の先達の指導も得ながら、園内の土を育て
より身近に、小さくて多様な自然に触れられる環境を作ろうと
試行錯誤を始めた。

地域の農の専門家に、土づくりについて教えていただく。
園庭の地面を剥がして、畑が作れるよう準備をする。
腐葉土や米糠などを混ぜ、土を発酵させる。
園庭を子どもの近くで整備する様子。

3. 自然と子どもを「つなぐ人」との出会い



自然とおしゃべりを教えてくれる面白い人。

インタープリターとの散歩。自然教育アドバイザーの菊間先生はじめ、自然に詳しい方が、子どもたちを自然の中への散歩に連れ出してくれる。普段は気が付かない花のタネに手を伸ばしてみる。草の蔓で遊んでみる。「あそぶ」と「かかわる」が、広がっていく。手を伸ばす先が広がるということは、心の体験も広がるということ。目には入っているのに、関わっていない世界とつながる扉が開く。保育者も、自然の中ならではの子どもの姿から、発見や学びを得る機会になっている。



自然の中で、自由な時間をつくる、大らかな人。

自然の中での遊びは、ダイナミックで、でも、さりげない。じっくり関わりながら、少しずつの変化を見つけて繋いでいくのが、子どもの時間。そんな時間と環境は、大人の意識によってはすぐに消えてしまう。だから、保育者は、丁寧にその時間を守っている。子どもたちが、自分のペースで経験していることを、感じ、存分に味わえるように、隣にいる。そんな大人が増えるよう、視点や意識共有をしていきたい。



自然の調べ方を背中（仕事）で教えてくれる人。

次ページでも紹介する「大地の再生」の取り組みを、園で指導してくれている造園家との出会いがあった2022年。自然から得られる資材をうまく加工しながら、土留柵をつくったり、土中整備をしてくれる。子どもの近くで、仕事をしてくれる人の存在を通して、子どもの遊びにも影響がある。動作、道具、いろいろな要素から、子どもたちはインスピレーションを得る。

また、例年通りの稲作も、地域の協力を引き続き得ながら行うことができた。高齢化がすすむ農家の現状のなかで、次世代との出会いも模索していく時期に入っていると考えている。

自然と子どもを繋いでくれる、たくさんの大人たちが、

職員にも、来訪者にも、職人さんにも、地域にも、いてくれる。

色々な大人に出会えることも、保育と自然をつなぐことの魅力・価値のひとつである。

生命に出会う作法や、生命に触れる態度、自然と人間の間を調える方法。

その知恵や恵を後世に伝えていくには、世代をこえた関係を繋ぎ続けていかななくてはならない。

こども園は、そのミーム（文化的遺伝子）を繋ぐための結節点になっていく。

TOPIC—地域との相互貢献を目指して



地域の里山整備に取り組む「大地の再生」

拠点型の自然保育フィールド整備に取り入れている、「大地の再生」という取り組みについて報告する。土中の空気と水の流れを整えるよう手入れをして、健やかで繋がりのある土地環境の実現を目指す。草刈りも、植物の成長の原理を理解しながら行う。刈る／伸びるを繰り返すのではなく、お互いがほどよく調っていきような手入れの仕方を保護者とともに、学び、実践し始めた。「草刈り」も、土中の空気循環を促す「点穴掘り」も子どもたちだけが見様見真似で、やってみる。遊ぶ、仕事する、暮らしをつくる、が繋がっていく。藪が、手入れされた優しい野原になる。フィールドを提供してくれている地主さんも喜んでくれている。保育のための環境を調べていくことで、地域景観が育まれる。園内に閉じず、地域の自然フィールドへ出ていく保育の地域貢献のかたちが見えてきている。



地域景観を保つため、電柱を撤去してソーラーパネル型の自立防犯灯を敷設。

子どもたちがよく散歩をする田んぼの谷地に、大きな電柱が突如現れた 2022 年夏。大きく丸く残っていた貴重な空を分割するように電線がかかってしまう可能性が出てしまった。経緯を調べてみると、地元住民の防犯灯設置要望に応えるかたちで公と住民協議会により設置されたものだった。園としては少しでも、子どもたちに大らかな景観を残したい、という思いから、地元住民と協議。園で費用を負担することを条件に、敷設した電柱を撤去し、ソーラーパネル型の自立防犯灯を敷設した。子どもたちは元気にその道を散歩している、「いつも通りの風景」を守ることができた。地域景観に貢献し、同時に、地域に対して園の想い・願いを表現する機会にもなった。

